

2023年3月12日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 110 : 1~2

ヨハネによる福音書 16 : 33

「頭を上げて」

(ハイデルベルク信仰問答 問 50~52) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 詩編 95 : 6~7

【祈祷】

【聖書】 詩編 110 : 1~2、ヨハネによる福音書 16 : 33

【説教】 「頭を上げて」

<天にのぼり>

わたしたちの教会では、毎週『ハイデルベルク信仰問答』という信仰の問答集を用いて、聖書の御言葉を聞いています。ここしばらくは、教会の信仰を言い表した「使徒信条」に書かれていることの内容を、順に追っています。

先週は、イエスさまの、「天にのぼり」ということについての御言葉を聞きました。

イエスさまは、わたしたちの罪のために十字架に架かって死に、そして三日目に復活の体をもってよみがえられ、そして天に上られました。

「天」というのは、わたしたちの地上の時間や、空間を超えているところであり、神さまがおられるところを意味する言葉です。

復活なされたイエスさまは、今、その天におられます。だから、わたしたちはそのお姿を、今この地上で、直接この目で見たり、この手で触れたりすることは出来ません。

でも、復活のイエスさまは、この世の特定の時代、特定の場所におられるのではなく、天におられるからこそ、聖霊によって、いつの時代でも、世界のどの場所であっても、わたしたち一人一人と、片時も離れずに、共にいて下さることがお出来になるのです。

ですから、復活なされたイエスさまが、天にのぼって下さったのは、わたしたちのためなのです。

また、わたしたちは、イエスさまの十字架による罪の赦しを信じたなら、その恵みを受け取って、洗礼を受けます。洗礼は、イエスさまとわたしたちを、一つに結び合わせます。

そうしてわたしたちは、イエスさまの体の一部となる。イエスさまもまた、頭として、わたしたちの体の一部となって下さる。その、イエスさまが、天におられる、というのです。

ということは、イエスさまに結ばれた者たちは、今この時、すでに自分の体の一部を、イエスさまにあって、天に持っている、ということです。地上を歩みながら、しかしイエスさまによって、わたしたちは天の御国にも、既に身を置いている。今も、天と繋がれている。

だからわたしたちは、地上にあっても、心を高くあげて、天上のことを求めつつ、神さまの思いを見つめつつ、この地上の日々を歩んでいきます。

やがてわたしたちも地上の歩みを終えたなら、イエスさまのおられる御許に引き上げられ、天に入れられる。復活に与る。そのことを望みつつ、天を見つめつつ、歩んでいきます。

このようなことを信じて、わたしたち教会は、「使徒信条」で、イエスさまが天に上られた、「天にのぼり」、ということ告白しているのです。

さて、しかし「使徒信条」は、イエスさまが「天にのぼり」と告白した後、さらに「神の右に座したまえり」と続けます。「神の右に座したまえり」。これにはどういう意味があるのでしょうか。それを、今日の『ハイデルベルク信仰問答』問 50～51 が問うています。

<神の右に座したまえり>

ところで、イエスさまが、天にのぼられ、神の右に座しておられる。この右、というのは位置的な左右を意味しているのではありません。右に座す、というのは、王の全権を委任されて、すべてを統治し、采配をふるう者となる、ということです。

つまり、父なる神さまは、天に上げられた御子イエスさまに、天と地とあらゆるものを支配する権限を、すべてお委ねになった、ということです。

「天にあげられた」というだけなら、実は旧約聖書にも、エリヤという預言者が天にあげられた、という記述があります。

しかし、イエスさまが天にあげられたのは、ただ天に入られた、というだけではない。「神の右に座し」、まことの王として君臨し、支配されている、ということを示しているのです。

ハイデルベルクの間 50 の答えは、そのことをこう表現しています。「そこにおいて（神の右）御自身がキリスト教会の頭であることをお示しになるためであり、この方によって御父は万物を統治なさるからです」。天に上げられたイエスさまが「神の右に座し」と言われているのは、この方が、まごうことなき教会の頭、わたしたち、救われた者たちの頭であり、王であり、すべてを支配なさっている、ということをお示しになるためなのです。

<天からの恵み>

そのことによって、わたしたちには二つの益、二つの恵みがある、と問 51 は教えています。答えにはこうあります。

まず一つ目は、「第一に、この方が御自身の聖霊を通して、御自分の部分であるわたしたちのうちに、天からの諸々の賜物を注ぎ込んでくださる、ということ」です。

天におられ、すべてを支配しておられるお方が、御自分の部分であるわたしたち、御自分の体の一部となっているわたしたちに、天からの諸々の賜物を、あらゆる恵みと祝福を、聖霊を通して注ぎ込んでくださる、と言います。

わたしたちが結ばれている、天におられるお方は、王なるお方。わたしたちの罪をすべて担い、そして滅びの死を克服し、すべてに勝利して下さったお方です。

この方から、全身に血が通って行き渡るように、あらゆる恵みが、イエスさまの体に結ばれたわたしたち一人一人へ、隅々へと注がれるのです。そうして、わたしたちは天におられるイエスさまから力を得て、命を得て、この地上での歩みを生かされていきます。わたしたちの命の源、力の源は、天におられる、王なるイエスさまから注がれるのです。

そして、二つ目の恵みとしてこうあります。「そうして次に、わたしたちをその御力によってすべての敵から守り支えてくださる、ということです」。

この、神の右に座し、天も地もすべてを支配しておられるお方が、わたしたちをその御力で、すべての敵から守り支えて下さいます。イエスさまは、すべての敵から、わたしたちを守って下さることがお出来になるのです。

しかしこのことは、わたしたちの苦難がなくなる、ということではないし、また自分を攻撃してくる嫌な人を、敵対する人を、一掃してもらえる、ということでもないでしょう。

聖書は、わたしたちが信仰を持って、救いに与っても、この世にあっては、苦難がある、迫害がある、罪との戦いがある、ということを正直に語っています。

今日読まれたヨハネによる福音書 16：33 は、イエスさまが弟子たちに語られた御言葉です。イエスさまはこう言われました。「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

「あなたがたがわたしによって平和を得る」と、イエスさまは言われました。平和。それは、穏やかな生活のことや、苦勞のない日々のことではありません。

イエスさまが与えて下さる平和とは、神さまとの間の平和です。わたしたちの罪が赦され、神さまに受け入れられ、神さまの恵みのもとで、神さまと共に生きるようになることです。

そのために、イエスさまはわたしたちの罪をすべて担って、わたしたちに罪の赦しを得させるために、わたしたちの罪の裁きを代わりに受け、わたしたちの代わりに十字架に架かって死んで下さったのです。

そうして、神さまに背いていた罪人であるわたしたちを、神さまと共に生きる神の子として下さった。これが、わたしたちのまことの平和です。この平和があるなら、わたしたちはどのような世の苦難をも、神さまに支えられて、耐え忍ぶことが出来るのです。

イエスさまは言って下さいました。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」「最もあなたたちに必要な平和は、もうわたしが十字架によって、勝ち取った。あなたたちが恐れる死は、もうわたしの復活によって、克服した。あなたたちに必要な恵みはすべて、わたしが勝ち取った。わたしがすべてをあなたに与える。わたしの許にいれば、何も恐れることはない。何も怯えることはない。勇気を出しなさい。わたしの勝利に、あなたを与らせよう。」

イエスさまが、まことの人となり、世に下り、貧しく、小さくなり、わたしたち罪人の最も惨めなところに身を置いて下さったことは、わたしたちの深い慰めであり、癒しです。

しかしまた、この方が、すべてに勝利なさり、天においてすべてを支配し、わたしたちを守り支えて下さる。それは、何と心強く、希望に満ちたものでしょうか。

<裁き主>

さて、「使徒信条」は、イエスさまについて「天にのぼり、神の右に座したまえり」と告白した後、こう続けます。「かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」。

これは、やがて来る、イエスさまの再臨の日、この世の終わりの日、最後の審判の日のことを語っています。問 52 はこのような問答です。「『生ける者と死ねる者とを審』かれるためのキリストの再臨は、あなたをどのように慰めるのですか。」

ハイデルベルクは、最後の審判、キリストの再臨を、わたしたちの「慰め」として語ろうとしています。

通常、多くの人々は、終わりの日のこと、最後の審判の日のことを、死んだ後に生きていた時の罪が明らかにされ、その報いを受ける、恐ろしい日として認識しているかも知れません。実際、昔のヨーロッパの教会に飾られた絵画では、最後の審判は大変恐ろしいものとして描かれていました。それはまさに、天国と地獄、運命の分かれ道であり、方や天使にいざなわれて光の雲に包まれ、方や悪魔に頭からバリバリと食べられている、というような。

そして、かつて教会では、聖書には語られていない、煉獄という魂の償いの場所を想定し、そこでの罪の償いを軽くするために、贖宥状、いわゆる免罪符を販売する、ということまで起こったのです。終末の恐ろしさを語り、その恐怖心を掻き立てて、脅しのようにして信じることを迫る。何かをしなければならぬと責め立てる。

しかし、そのようなものは、キリスト教の信仰とは、まったく相反するものであり、聖書に書かれていることではありません。

そもそも、わたしたちが救われる、というのは、わたしたちの罪を、イエスさまが代わりに担って下さり、この方の十字架の死によって、わたしたちが罪を赦された、と宣言されることです。神さまとの間の壊れた関係を、回復させていただいた。神さまとの愛の交わりに生きる者とされた。神さまとの平和をいただいた。それが、わたしたちの救いです。

わたしたちの罪の裁きは、もうすでに、イエスさまの上にごだされ、わたしたちの罪の償いは、イエスさまがすでにその十字架の苦しみと死によって、終わらせて下さったのです。

そうであるならば、終わりの日、わたしたちを審くために、再び来られるイエスさまは、わたしたちの罪を断罪しに来られるものではありません。

なぜなら、この審判者こそが。裁き主こそが。わたしたちの罪を償われた方だからです。

わたしたちを罪から解放するために、御自分の命を捨てて、わたしたちの罪を担い、十字架に架かって下さったその方が、最後の審判の時に、わたしたちの前に立たれるのです。

ハイデルベルクの間 52 の問答は、こうです。「『生ける者と死ねる者とを審』かれるためのキリストの再臨は、あなたをどのように慰めるのですか。」「答 わたしがあらゆる悲しみや迫害の中でも頭を上げて、かつてわたしのために神の裁きに自らを差し出し、すべての呪いをわたしから取り去ってくださった、まさにその裁き主が天から来られることを待ち望むように、です。」

終りの日にわたしを裁かれる方は、かつてわたしのために、神の裁きに自らを差し出された方。罪によって神さまから断絶される呪いの死を、わたしから取り去って下さった方。まさにそのような方が、裁き主として、天から来て下さるのです。

イエスさまに罪を贖われた者にとって、終わりの日とは、最後の審判とは、この救い主が目の前に立って下さり、その復活のお姿をこの目で仰ぎ、「あなたの罪はまことに、このわたしの十字架によって赦されている」との宣言を、はっきりと耳にする日に他なりません。

今は、この罪の赦しは、直接目で見ることは出来ず、信仰によって受け止めることです。

しかし、終わりの日には、この信じていたお方が、目の前に立たれ、顔と顔を合わせ、まことの救い主であることを確信させられる。聖書に語られていたことは、すべて真実であったと、はっきり、すべての人々に明らかにされるのです。

イエスさまが再び来られる日とは、救いの恵みが完全に明らかにされ、神さまのご支配に全世界が包まれ、わたしたちもまた、復活の体と永遠の命によみがえり、救いが完成する時なのです。

これが、慰め以外の何でありましょうか。

これが、わたしたちが最後にたどり着くところです。そして、もう今や、わたしたちはこの終わりの日の祝福を、確かな約束として手にすることを赦されているのです。

イエスさまを知ったわたしたちは、この終わりの日、最後の審判がイエスさまによってなされる、その慰めの日を、究極の希望の日として、歩んでいくことが出来るのです。

<頭を上げて>

ですから、問 52 の後半では、こう語られています。「この方は、御自分とわたしの敵をことごとく永遠の罰に投げ込まれる一方、わたしを、すべての選ばれた者たちと共にその御許へ、すなわち天の喜びと栄光の中へと迎え入れてくださるのです。」

来るべき日、わたしたちの救い主、贖い主、そして裁き主のイエスさまは、「御自分とわたしの敵をことごとく永遠の罰に投げ込まれ」ます。

ここに「御自分と『わたしの敵』」とあります。イエスさまと、わたしの敵。これは、さっきも申し上げたように、今わたしたちがこの世で敵対している人々、攻撃してくる人々を、イエスさまが罰して下さるという意味ではありません。

まず、イエスさまの「御自分の敵」を考えてみて下さい。イエスさまに敵対する者。神さまに背き、逆らう者。イエスさまを攻撃し、裏切り、十字架につけた者。それは、まさに、

このわたしに他なりません。

ですから、ここは、わたしの敵はイエスさまの敵、という意味ではないのです。

そうではなく、敵とは、神さまとわたしたちの間を引き裂こうとする力のことです。わたしたちを救いから遠ざける力のことです。罪の力。悪の力。死の力。それを、イエスさまはご自分の敵とし、またわたしたちの敵となさいます。

そして、イエスさまは十字架と復活によって、すでにこれらに勝利して下さっています。今はまだ、わたしたちはそれらの残党のようなものに、捕らわれたり、振り回されたりしています。しかし、それも終わりの日には、イエスさまの勝利が完全に明らかになり、それらを永遠の罰に投げ込んで、滅ぼして下さるのです。

そして、「わたしを、すべての選ばれた者たちと共にその御許へ、すなわち天の喜びと栄光の中へと迎え入れてくださるのです」と言います。

わたしたちの体の一部となって下さった、天におられるイエスさまが、終わりの日には、罪と死に対する完全な勝利を明らかにして下さり、ご自分の御許へとわたしたちを引き上げて下さり、天の喜びと栄光の中へ迎え入れて下さいます。

そこには、これまで救われたすべての者たちが招き入れられています。すべての時代の、世界のすべての場所の、イエスさまの体に一つに結ばれたすべての者たちが、喜びの中で、共に相まみえることでしょう。

ですから、ハイデルベルクは、「わたしがあらゆる悲しみや迫害の中でも頭を上げて、イエスさまが天から来られることを待ち望むのだ」と言うのです。

わたしたちには、悲しみがある。迫害がある。悩みがある。苦難がある。しかし、わたしたちは、天におられる勝利の主にもう結ばれているのです。

あらゆる悲しみ、あらゆる苦難を、御自分もその身に受けて、わたしたちの悲惨さを何もかもご存知のお方が、わたしたちを天の喜びと栄光の中に迎え入れて下さると、約束して下さっているのです。

ですから、わたしたちは地上の苦しみや困難に、絶望することはありません。

もちろん、傷ついたり、倒れたり、涙を流すことは、これからも多くあるかも知れません。

もしその時に、わたしたちが、この天の喜びや希望を知らないなら。イエスさまを知らないなら。わたしたちは、目の前の苦しみに人生のすべてを覆われて、壁に囲まれているような気持ちになり、顔を伏せ、殻に閉じこもり、うなだれるしかなくなるでしょう。

でも、わたしたちには、天におられるイエスさまが、共におられます。わたしたちは、天に、自分の体の一部として、神の右に座しておられ、勝利者であり、すべてを支配しておられるイエスさまを、持っているのです。

わたしたちを覆っているのは、世の悲惨さや、苦難や、罪や、悪ではありません。わたしたちの救い主である、イエスさまの慰めの御手こそが、わたしたちを覆っているのです。

ここに確かな慰めがあります。ここにしか本当の希望はない、と言ってもよいくらいです。だから、わたしたちは、頭を上げるのです。やがて天へと迎え入れられることを心待ちにしつつ。地上の歩みを終えた向こうに、満ち溢れるほどの祝福が待っていることを確信しつつ。イエスさまを、待ち望んで生きるのです。

天を思って歩むことは、この地上の歩みを蔑ろにすることや、厭世的になることではありません。

むしろ、イエスさまに守られ、支えられている、その天からの御力によって、わたしたちはこの地上を力強く、忍耐強く、喜びをもって歩み、神さまの恵みを証しするようにと召されているのです。救いに与ったわたしたちは、神さま恵みのご支配が、この地の人々へますます広がっていくために、今この地上に置かれているのです。

だから、わたしたち教会は、イエスさまが再び来られる日を、頭を上げて待ち望みつつ、イエスさまにこそ、まことの慰め、まことの喜びがあることを人々に告げ知らせるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

十字架にかかり、復活し、天に上げられた、わたしたちの頭なるイエスさまが、すべて支配するお方として神さまの右に座し、賜物と御力をわたしたちに豊かに注いで下さり、地上の歩みを、守り、支えて下さることを感謝いたします。

そして、終わりの日、わたしたちを審くために来られる方は、わたしたちの罪を贖って下さったイエスさまであることを示され、感謝いたします。

一人でも多くの者が、このまことの慰め、まことの希望に、与ることが出来ますように。わたしたちには、多くの悲しみや、苦しみがあります。耐えがたい苦難があります。

しかし、それらのわたしたちの苦しみをすべてご存知でいて下さるイエスさまが、今や天におられ、すべてに勝利して下さり、いつもわたしたちと共にあって、恵みを注ぎ、御力をもって支え、守り、そして、ついにはわたしたちを御許へと引き上げて下さいます。

ただイエスさまの御手に寄り縋って、イエスさまにのみ希望を置いて、イエスさまが再び来られる日を、頭を上げて待ち望みつつ、与えられた日々を歩むことが出来ますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 579 「主を仰ぎ見れば」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】 【主の祈り】

【讃美歌】 28 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン